香山壽夫先生インタビュー

―建築の持つ公共性の意義とコスト管理の大切さ― ＜前編＞

有限会社香山壽夫建築研究所　所長　香山　壽夫

――― 本日は、東京大学名誉教授で建築家の香山壽夫先生から、「公共建築の企画・設計段階におけるコスト管理を考える」というテーマを基本としつつ、様々なご経験を踏まえた大所高所からのお話やご提言をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

香山　こちらこそ、よろしくお願いします。

建築の公共性とは何か

――― 香山先生は、長年にわたり、数多くの公共建築の設計に携わっていらっしゃいます。そこで、まずは、公共建築やその設計についてのお考えについてお聞かせください。

香山　僕はこれまで様々な建築の設計をやってまいりました。公衆便所から教会まで、様々なものをやりましたが、結果的には、劇場、博物館、学校、大学といった公共建築が多いと言えば多いんです。

まず、公共建築について論じる前に、僕は、そもそも建築というものは、どういう建築であれ、例えば、絶海の孤島の建築や、無人の山中の隠居小屋とかを別にすれば、すべて公共性を持っていると考えることが大切だと思うんです。例え個人の家であっても、町並みをつくっていくわけですし、町の通りという公共性をつくり出すためには、個人の家もそういう考えを持って建てなければいけません。

お寺や教会というのは、今日で言う公共建築という範疇には入らないかもしれません。しかし昔で言えば本来的には公共的な働きをしていました。教会では貧しい人を世話する。お寺もそうで、学校の役割は大体、お寺が果たしていました。今日で言う社会人教育みたいなのもやっていたでしょう。例を挙げればきりがありませんが、そういうふうに建築は基本的に公共的な意味を持っているわけです。

そういうことで、厳密な公共建築の定義は、別途きちんと議論しなくてはいけないと思いますが、まず大昔に建築が生まれた瞬間から公共的な性格を持っていたと考えられるべきだと思って、これまでの設計の仕事をしてきました。

――― 例えば公共建築賞は、公共性の高い建物などが審査対象となっています。その審査委員会では、「公共性とは何か？」、「公共建築の範囲は？」などについて、毎回毎回、議論されています。

香山　審査の度に継続的に議論されているとは、それ自体、まず、すばらしいことですね。というのは、公共性とは何かというのは、絶えず問い直され、議論される対象だと思うからです。公共性自体が非常に複雑・多様な概念で、それは時代により、常に変化しているからです。

――― 公共性を持った建物ということになると、かなり範囲が広がります。先生は、民間建築の設計にも携わってこられたと思いますが……。

香山　建築設計の出発点のときには、友人の住宅の設計、ホテルやマンションも設計したことはありますが、数は少ないのです。教会の建築はずっ

とやってきました。教会は、ヨーロッパでは、国によっては税金で建てられることもあるようですが、日本では教会の人がお金を出しているわけですから、民間と言うべきでしょう。

税金を使って建てられるという点に限定して考えてみますと、税金が使われて建てられ、国民が利用するという点において、公共性が捉えられるかもしれません。

しかし、僕たち設計する立場から考えてみますと、そこに計画性があるかどうかということを強く意識します。つまり、「税金」というお金が先に準備されている。それをどう使うかというために計画が立てられます。言い換えれば、大きな計画性を持っているのが公共建築だ、というのが実際の設計に携わる人間の実感です。民間建築においても、もちろん予算というものは決められていますが、公共に比べると柔軟性があり、当初の計画にはそれほど厳しく縛られない場合が多い。

企画段階から設計や施工に繋がる一連の流れの中に、中核となる計画性がしっかりあるということが、税金でつくることの大きな特質だ、と僕は思っています。

――　公共建築の場合には、企画段階、つまり予算がセットされる段階で計画の大枠が決まります。実施段階でその内容を大きく変えることはそれほど簡単にはできませんから、発注者は企画の段階で、適切な工期、コスト、品質を、実現性の高いものにセットしておく必要があります。

香山　そこに、大きな、そして重要な問題があります。建築の多様性や複合化という今日的な問題に対してどう対応するのか、ということです。

建築の多様性、複合化への対応

――　企画段階では、いろいろなコンサルタントがお手伝いをするケースがあります。その段階で、建築の基本的な品質・性能をどのように決めたらよいか、それに見合う予算をどの程度準備すればよいか、先生はどのようにお考えですか。

香山　それこそ、まさに様々なプロジェクトにおいて直面している問題で、答えを探して格闘している段階です。僕たちの場合でも設計業務において様々なコンサルタントが関わっています。劇場の設計を例にとると、一般の建築家にとっても、また演劇をやる人にとっても、劇場について知っていることは部分的ですから、劇場を専門とするコンサルタントの存在意義は大きい。一方で、そのコンサルタントの知識、経験は劇場だけに限られている、という問題があります。劇場の機能や使い勝手は時代とともに変化しています。かつての経験は必要ですが、経験は計画・構想においては両刃の剣でもある。僕たちの仕事は、新しいもの、これから将来使われ続けるものをつくるわけですから、過去の建築がそのままの形で出来上がることはない。過去の建築をこれから建てるものにどう活かすかというときに、経験がたくさんあ

るが故に、却って、知識が固定的になっている場合もあります。例えば設計の初期段階で示されるアイディアは、「うーん、いつもの定型が出ているな」と感じることが多い。

更にこういう問題もあります。従来の公共建築には、例えば、劇場、美術館、あるいは学校という分類がありますが、近年ではそれらが複合化して建てられるケースが多くなっていることです。しかし、こうした新しい複合性、時代の変化とともに求められる多様性に対しては、専門に特化したコンサルタントからは十分な案が出てこない傾向がある。だから、それを企画段階でどのように計画案としてまとめていくかというのが課題になってきます。

即ち、企画段階で、完全な答えは固定できないので、設計段階に入って、様々な具体的な問題が顕在化する状況の中で、もう一度考え直さないと適切な解は見出せない、ということになる。そうなると、そもそも企画、基本設計、実施設計というふうに分けること自体は、必要であるにせよ、設計を進める中で、もう一度前の段階にまでさかのぼって練り直さなくてはいけないということが出てくるのです。

もちろん、コンサルタントの中にはそのような問題意識をもって幅広く努力している人たちも大勢いますので、これからもそのような専門家との協同は大切だと思っています。

――― 企画段階での具体的なコストや面積の算定については、いかがでしょうか。

香山　通常、建築家や発注者にとって、企画するときの基本は面積の算定ですよね。こういう提案についてはこのぐらい要るだろうと積算して、面積を算定して、大体単価を掛けて予算がつくということです。しかし、複合的なものとなると、その面積の内容が従来みたいにきちんと分けられない、ということになります。

例として劇場を挙げると、一番お金がかかるのは実は舞台裏です。そこに複雑な機構がいろいろ設置されます。舞台裏の面積、単価には、舞台機構という複雑な工場のようなものが含まれますから、その予算は、通常は建築工事費とは別に組みます。しかし、劇場ではあるけれども、市民の展示会や発表会にも活用できるようにしようと考えると、従来のように、舞台設備があり観客席があるという設計の組み立て方では対応できないわけです。面積も設備も使い方も従来とは違う組み方を考えていく必要がある。そのような場合には、企画段階での予算の積上げの際にどう組み立てるのか。結局、建築の多様性、複合性から生じてくることですが、その中身は一言で言えないぐらい複雑になる。これは、一つの例で、同じような問題が、様々な場合に起こってくる。最近直面する大きな課題だと思っています。

企画と市民参加との関係

――― 公共建築の場合、企画段階で想定している内容が、実際の設計段階で大きく変わると、予算不足が生じることがあります……。

香山　設計するときには、最初にその与条件となる具体的な数字、具体的な面積は、必要だし、実際、示して欲しいのです。しかし、問題はそれを固定化して最後まで設計できるかというと、それは、この頃ますます困難になってきました。

企画の中身そのものに関してもそうで、設計を進める中で変わっていくことが多い。企画の段階で複合化が予定されている場合でも、複合化した建物の中身をどうするか、実際には設計しながら考えていかねばならないという難しさがあります。最近は、基本設計の段階で「市民参加で設計を進める」ことが設計の条件となっている場合が多いのです。それは悪いことでははい。好ましいことだと思います。しかし市民参加を求めるということは、市民の意見や要望を取り入れることであり、それは、即ち元々の企画を練り直すということになるのです。

現実的には、企画の枠組みの中で決められた予算を大きく増額することは困難です。どこかを減らして、どこかを増やすという調整をするしかないのです。少ない資金でやりくりする家計みたいなもので、教育費を増やすのなら交際費を減らす、というようなものです。実際、市民が有効に使えるようにするためには、練り直すということはもちろん必要なことですし、設計者から言えば、チャレンジングな、面白いことでもあるのです。

――― その場合には、市民からの要望を設計に反映することを、誰が決定するかという問題が生じますね。

香山　そうです。まさにそれが問題なのです。市民からは、様々な要望が上がる。でも、建築には必ず面積、コストの制約があります。要望を受け入れてどんどんコストを増やしていくということはできません。その制約条件の中でどうやって企画内容を組み替えていくか、その工夫が必要です。とりわけ公共建築には説明責任が強く求められていますから、組み替えの合理性がきちんと説明できなければならない。企画に基づいてきちっと設計を行うという精神も必要なことです。実際にこれまで、そういう条件の中で、公共建築はきちっと進められてきたと思っています。

――― 予算を確保する際にも、財政当局や市民にもきちんと納得してもらえるような合理的なものにする必要がありますね。

香山　その際に重要だと僕がこの頃思うのは、単に市民の要求を聞くのではなく、計画自体の内に市民を巻き込んで行うこと。これからの建築ではますますそれが求められていくと思うけれども、設計の段階でそれをどういうふうに導き入れるのか。まだまだ試行錯誤の段階だとは思いますが……。

――― 市民参加によって企画が変わる可能性があることを前提条件として、発注者が企画をつくって建築家に設計をお願いする。そしてみんなで市民の声をよく聞く。建築家と市民との間には直接の契約関係がありませんから、その変更の判断は発注者がする必要がありますが……。

香山　そうです。誰が判断するのか、できるのか。「市民の新たな要望を受け入れますか」と問いかけると、「もう少し予算を追加して実現しましょう」という発注者もいます。しかし、財源に制約は必ずあるわけで、いつも簡単にはいかない。

僕は、企画の組み替えなどを市民と一緒にやることの一番大切な意味は、市民にとって、上から与えられた施設ではなくて、自分が一緒に参加したものだという自覚ができることにあると思っています。公共建築にとっては、それを市民みんなが自分たちの建物だと思ってくれること、これがとても貴重なことだと思います。建物の完成後の運用も一緒にやっていく。運営に市民がボランティアで参加すれば、運営費の削減にも繋がる。様々な良い面がありますね。

コスト管理と設計者選定の重要性

――― 次に、設計の分野にお話を進めてまいります。香山先生は、建築家としてのお仕事をメインとしつつ、発注者からの依頼でプロポーザルの審査を通じて設計者を選定されることも多いと思います。まずは建築家として公共建築に携わる立場から、コストに関する普段の取組み方を教えていただけますか。

香山　ちょっと抽象論になるかもしれません。基本的な認識ですが、僕は、建築というものはコス

トがあって成り立っている仕事だということ。それを大前提に考えています。友人に絵描きや彫刻家がいます。彼らに「いいな。君たちは金のことを考えないで描いている」とよく言うのですが、それが３万円でしか売れない人もいれば、1,000万円で売れたりしている人もいます。別に1,000万円と３万円の売値にかけた予算の違いがあるわけではない。

一方で、建築家はみんな予算の中で仕事をしている。それは制約条件であり、うるさいということではありません。僕たちは、そんな贅沢な設計はあまりしたことはありませんが、逆にそのような制約条件があるからこそ設計の面白さがあるのです。制約がなければ、自由で面白い、いいものができるかというと、それは違います。

かつて、若い頃、アメリカに居たとき、制約がないに等しい仕事を頼まれたことがありました。僕は引き受けませんでしたが、アメリカの大金持ちが若手の建築家に自分の別荘の設計を頼む話なのです。「コストを考えるな。好きなことをやれ」と。しかしそんなものは全然面白くない。敷地の制約もない。建築には、具体的には敷地の制約があり、風土の制約がある。その上に、コストの制約があるからこそ面白いのです。

建築家は、設計の初めに自由なイメージを描くと言いますね。しかしそのときに、コストのイメージがなくては描けないと、僕は思っています。細かく１円まで積算するということではないのです。だけど、その与えられたコストでは、例えば全体を石でつくったような建物がつくれるかを考える。この頃木造建築も高いですからね。例えば初めに「僕たちは木造で行きましょう」と提案し、発注者からも「木造にしてくださいよ」と依頼されたけれども、最終的には「木造を使うのは難しいな、基本構造は鉄筋コンクリートでやって、木材を張るというイメージをしておかなければ予算に収まらない」という判断をする。予算を無視して勝手に絵を描いたって意味ないですからね。

ということで、設計の初期の段階でもコストの大きなイメージ、即ち構造の形式、材料の形式、それから大きくはコストと面積と関係しますから、劇場だと広いホワイエなんかを持てるようなものなのか、それとも、もっとコンパクトにしていくのか。それらを比較検討することによって、設計としてはそれぞれ面白い形でできるわけです。設計の段階で大きな形のイメージがあるのと同じように、構造、素材において、コストのイメージがなくてはいけない。僕は、そこにこそ、建築をつくっていく面白さがあると思っています。

だから、プロポーザルの審査員になって設計者を選ぶときにも、そういうイメージを持っていない人は選ばない方がいいと思っています。

――― それは、応募者へのヒアリングの際に判断されるのですか。

香山　いや、ヒアリングの前に、プロポーザルでは予め過去の設計の実績の提出を求めますよね。僕は、その実績の中身で、ある程度判断できると思うのです。類似施設、同種施設がいくつあれば何点だということだけではなく、実績の中身を見ようということです。

「判断の理由は何ですか」と問われたら、「60年の経験がある」からでは認められないし、それでは済まない。一言で言えば、建築家というものは出発点からコストのイメージが形のイメージと一緒になくてはいけない、と私は思っています。

自分が設計をするときにも本当に初めの段階から、自分だけが思うのではなく、アトリエ全体で「今回はどのぐらいのコストでいけるかな」「これは前にやった、ああいう感じではいかないんじゃないですか」と議論をします。コストは、非常に重要な要素の一つでしょう。

ですから、設計者を選ぶときにも、応募資料を読んでいて、「これはコストの考えが詰められていないではないか。示されている予算の中で、こんなものはつくれるわけがないだろう」と判断することが大切だ、と思っています。それを判定するのは審査員の一つの重要な作業だと思います。

――― 先生が設計をされる際には、コスト管理について具体的にどのようなやり方をとっていらっしゃるのでしょうか。

香山　それは本当に難しい、口で言うように簡単にいかない問題です。最終的な成果品として客観的に数値をきちっと拾えるようにするためには、細部を決めないといけない。そのように、コストを最終的なところまできちっと持っていくためには、基本設計の初期段階から、そういうやわらかい段階から、僕たちは３回ほどコストの検討を自分たちでやっています。場合によっては、ちょっとお金はかかるのですが、積算事務所に依頼しています。

ただ、そのときは、言葉でしか言えないようなやわらかい要素がいっぱいあるわけですから、それをうまく伝えておかないと、図面を出せばコストが拾えるというようなものとは違います。具体的には、言葉でしか説明できないものがたくさんある。「ここのところは石を使いたいけれども、そんなにぴちっといかなくてもよい」とか、木材なら、「少し節があってもいいな」とか、いろいろ言います。

そんなことが言えるのはまだ簡単な方です。もっとやわらかい段階もあります。概算とは、そういうものが伝わらないとできない積算でしょう。だから、それがもう少しぴちっといけるのかどうか、これは僕たちにもまだ分からない。ただ、そこがきちんとしすぎてしまうと、やわらかく設計している意味もなくなってしまうので、困るわけです。

――― 材料や設備機器にも、松竹梅のようなグレードがあると思いますが、そのようなグレードで表せないようなところもあるのですね。

香山　やわらかさというのは、言葉でしか伝えられないがグレードを示すものだと思っています。しょっちゅう一緒にやっている仲間同士、あるいは積算事務所には、大体あのときのあの感じをもう少し簡単にするぐらいのところで入れておいてみたら、というようなことで言うわけです。そこら辺のやわらかさを今後どのように共有化していくのかが、今の課題の具体的なポイントの一つでしょう。

施工技術との連携

――― 最近の傾向かと思うのですが、工事費が非常に高騰していますから、設計図書のとおりに発注しようとすると当初の予算をオーバーしてしまう。だから発注者としては、出来るだけ施工会社に早い段階から関与してもらいたい。そしてコストと工期が確実に収まるようにしてもらいたい。そのようなことが増えている印象を持ちます。そのために新しい契約方式が様々に工夫されています。

香山　発注者として、大きな仕事の責任を持っておられる方はそう考えるでしょう。僕も周りでそういうことはたくさん耳にします。

一方で、僕たちの設計の仕方では、そんなにコストオーバーすることは通常考えられないのです。だって何年も設計をやっていますからね。これは単にモラルとかいうことではなくて、僕は、設定された予算に合わせていく。マラソンを走っていく場合と同じで、自分のペースでぴちっとそこにゴールインする。

それができないのであれば、例えばマラソンで

予め通過タイムを決めておくように、たくさんのチェックポイントを公がつくっていく。最終のタイムを見るだけではダメなのでしょうね。

――― コスト管理には、今後とも工夫が必要だということですね。

香山　新しく出てきているコンピュータを使ったいろんな積算方式が、全部じゃないにしても、一つの解決の道になるかもしれない。ただ、僕には分からないから、それはその専門家に任せようと思います。もう一つは、施工の技術が必要なわけです。今までも設計者は、基本的にこれまでの経験に基づき、また確立されている施工の技術に基づいて行ってきた。言うまでもないことですが、大きな構造方式とか、例えば地下に杭を打つのか打たないのか、それをどういう方法でやるか、それは施工の技術がベースです。それによって工事費は大きく変化します。設計者としても考えないわけではありません。しかしそういうことも含め、技術が大きく進歩した現代では、今まで以上に施工サイドと協同していかないと精度の高い設計はできないし、とりわけコスト管理はできないということでしょう。

――― そういう意図を持って、設計者と施工者とが協力しながら仕事を進めるのは重要なことですね。

香山　大昔のいい建物は、言ってみればみんなデザインビルドです。シャルトルの大聖堂にせよ、唐招提寺にせよ、歴史的な大建築は何だって設計者と施工者とが一体となってやっているのです。ですから、いい姿で、企画者も設計者も施工者も十分に協力してやらなくては良いものはできない、ということは建築の基本です。そうであるが故に、それぞれのところでやるべき責任を曖昧にしてしまってはいけないと思います。

（以下、次号に続く）

聞き手／
本誌編集企画委員長　羽山 眞一
（（一社）公共建築協会　常務理事）
本誌発行人　川元　茂
（（一財）建築コスト管理システム研究所　専務理事）

香山壽夫先生インタビュー

―建築の持つ公共性の意義とコスト管理の大切さ―＜後編＞

有限会社香山壽夫建築研究所　所長　香山　壽夫

建築教育のあり方

――― 引き続き香山先生にお話をお伺いいたします。公共的な建築には文化的な価値を付加する要素も大きいですから、千年前からずっと残っているような建築が生み出されてきました。これからは、既存建築物に対しても、様々に手をかけて、時間をかけて手づくりをしていくことが大切になるのでしょうか。

香山　そのとおりだとは思います。壊して建て直すではなく、手を入れて残していくということは、本当に心を入れてそれを積み上げていくということで、それだから、千年経ってもいい建物として残るということでしょう。ですから、単に、テナントが変わったので建て直した建物と、既存の建物を直しながら良くなっていったものとは、同じ建物でも人の心に働きかける力が全然違うんですよ。しかしそれを口や精神論だけで言っていては済まないわけで、その二つの違いを、具体的なシステムや方法として根付くように考えていかなければならない。大学の中でそのような問題意識を持っている人間が、実際の問題としてその辺を理論としても、教育としても整えていかなければならないと思っています。簡単なことではないけれども。

――― 確かに具体的な方法論が必要ですね。建築学科で学んだ人間にとっては、それが責務であり、仕事になるのですね。

香山　そう思います。大学で設計論を教える立場にあって、かつ実際に設計活動をしている人たちは、設計理論の中にそのような具体性を入れていく必要があると思います。理念的、観念的なことに走りすぎてはいけない。

建築家や施工者だけではなく市民にも応えられるような、建物を見た人が、これを使いたいと思うような建築の議論が育ってくれば、その中から少しずつ良いものが出てくると思います。そのような問題意識を持っている人たちも近頃少しずつ増えてきて、その方法を構築していこうとする段階になってきたような気もします。

――― 建築の企画、設計、施工の様々な手順を進めていく際に、発注者、設計者、施工者以外にも新たな関係者が登場するようになってきました。そういう中で、対象物によっての最適な組み合わせも考える必要が出てきました。

香山　正にそこがこれからの問題だと思うのです。大学の中での教育研究でもそのようなアプローチが必要になっていると思います。

――― それに関連して、大学教育のあり方についてお伺いします。いわゆる高等教育については、学術の基礎的な教育研究が極めて重要であるという意見があります。一方で、例えば建築学科は、卒業後には建築に携わる職業に就くことがある程度前提となっています。そのために、高等教育においても当該職業分野に関する基礎的教育の充実も必要ではないか、という見方もあります。医学部では、卒業後に医師になることを前提にし

た基礎的教育が行われ、国家試験に合格して医師になります。非常に高度な専門分野ではありますが、一種の職業訓練が行われているとも見えます。

大学教育として、倫理、理念、基本的な考え方を学ぶことは必要不可欠です。一方で、先ほど先生がおっしゃった方法論のようなもの、現場と直結した何らかの教育や経験のようなものをある程度身につけることも大切なのでしょうか。

香山　建築学科には、基礎的な職業訓練に相当する教育が必要だということについて、僕は100％そういう考えです。自分が、実際目にした例ですけれども、50数年前、アメリカのペンシルベニア大学に留学したときに驚いたのは、大学院ではなくて建築学部建築学科を卒業するためには医学部と同じで６年かかったこと。そして６年次に提出する卒業設計は、正に今日のお話に関連することで、平・立・断といった一般図だけでなく、矩計図、そして積算書までつけなくてはいけなかったことです。ということは、建築学科でそれだけの教育をしなければできないでしょう。積算、矩計、ディテールを全部描かせた、そんなぶ厚い設計図書にして、それで説明する。日本では、見栄えの良いパースを描いて、それでコマーシャルの説明図みたいに描けばいいという感じでしょう。当時のアメリカの卒業設計の感覚から見れば、それは素人のものであって専門家のものではない。

――――　それは驚きです。

香山　アメリカでは、卒業させて社会に出すというのが大学の責任ですから、変な学生を世に出したらその大学の名声が落ちることになります。職業的にきちっとしていない人間をなぜこの大学は卒業させたのか、と言われるわけですよ。即ち、そこの認識が違うのです。ですから、本当に専門の教育は徹底していた。ただ、今のアメリカではちょっとそれが変わってきています。そして、これからどうなるのかは分からない。つまりそれは先ほどの問題に返ってきます。即ち、建築家の受け止められ方がどうなるかということ。例えば、今は、ユニークで人目を引く建築をつくることが話題になる時代ですから。

――――　ちょっと目立つ建築などですか。

香山　そうですね。ただ日本の大学教育は、元々きちっと職業的な専門家としては出してはいなかった面もある。どのような大学を卒業しようが、卒業式の翌日からきちんと設計できるかというと、できない。ではどうしていたかというと、実際に社会に出てから教育していたわけですね。

――――　逆に、学生時代は夢のある設計か何かをやって……。

香山　そう、夢があればいい。というより、ただ夢だけ、あればいい。そこが昔のアメリカは違ったんですよ。ただ、今、アメリカも非常にコンセプチュアルで見栄えの良い絵をしっかりと描けば世界的に有名になるという感じが出てきている面もある。全部が全部そうということではないですよ。しかし、この辺りは、今日の社会全体の大きな問題ですね。

ただ、僕は、率直に言って、今のままでやっていったら、建築学科に来る人間自体がいなくなるかもしれないという危機感もあります。問題の根本は基礎教育をきちっとやらないで専門の学校と言えるのかということ。僕が大学で教えていたときに病院の課題を出したことがあって、ちょうどその時医学部長をしていたのが親友だったから、講評会に出てもらった。彼が「この病院を設計したのは何年生ですか」と言うから、「３年の後期の課題だ」と答えた。「これは勉強し始めて何年？」、「１年」、「えっ、１年で設計しているんですか。いやそれは、私たちには考えられない。我々は、学生の時に全部基礎の学科を勉強させて、それから実地をインターンで経験させて、それで初めて手術をさせる。建築というのは荒っぽいことをするのですね」と。基礎教育を当然だと考える人から見れば、そうでしょうね。

19世紀からフランスで始まった建築教育、それがアメリカにも入ってきました。その代表格が、僕の学んだ大学だったわけですが、基本から順々

にやって、学年が終わる毎に落第させ、落第させ、落第させて入学したときの２割ぐらいしか卒業しないのです。僕がアメリカへ行った60年前は、まだそのやり方が残っていた時でした。確かに職業教育としては、誠に医学部に似ていたわけです。

建築学科の教育に、もっとメリハリの利いた選択肢があってもよいのかもしれません。デザインに特化した学校と、基礎的技術を教える学校とに分かれていて、学生が選択する。それぞれ特徴の違う卒業生が出てそれぞれの分野で活躍する。

――― 我々が学生だった昭和50年代は、本当の建築設計をやりたい人は、給料は別として、建築家に弟子入りするような覚悟で行け、と言われていた記憶があります。

香山　実際、そこで手弁当で働きながら、勉強していたのですよね。徒弟教育と同じ。中世までさかのぼれば、みんなそういう形だったわけですよ。日本の大工でも、ヨーロッパの石工でも、みんなまず徒弟になる。建築教育もそこまで戻るという考えもあるかもしれない。大学は、職能というか、根本のところがいろんな点で問われている。大学なら大学、就職なら就職のときに、何を自らの特色としていくのか。それが問われているだろうと思います。日本は全体が曖昧な社会だと言っていいのかもしれない。

地域で求められる建築家像

――― 先ほど（前号参照）市民参加のお話がありました。その市民の要望を建物として実現させるためには、それぞれの地域での建築家の役割が大きくなる気がするのですが、どのような印象をお持ちでしょうか。

香山　市民参加にはいい面がたくさんありますが、まず何よりも、人々が建築に求めているものは何なのか、そのことが直接分かります。地方に行くと、住民の方々にまずこう言われることが多い。「僕たちの欲しいのは単純なことで、住みやすい町、長く住める町をつくってほしいことです」と。ただしそれに続けて、「建築家なんか僕たちは本当は全然信用していないんです」と大抵言われます。「長く愛着の持てる建築をやっていただけませんか」と。言葉は様々ですが、言っている気持ちは大体そういうことです。「僕たちは、ここに住み着いて、子どもを育てて、そして楽しく暮らせる町をつくりたいのです」と。有名になって新聞やテレビに出たからといっても、その後、満足に使えなくなる建物なんかはいっぱいあるわけです。「隣の町のあれ、あれはごめんです」と、こうなります。それは単なる非難ではなくて、健全な建築、何年もずっと続く建築をつくってほしいという切なる願いがそこにある。だって、そうやってみんな生きているわけですからね。そう求めている声もいっぱいあるのです。僕はむしろ、そこに希望があると思うのです。プロフェッショナルとして僕たちは、その思いをちゃんとつかまえて応えているのだろうかと自問しま

す。そうでなければ専門家としては恥ずかしいのではないか。

――― そういう建築家たちを盛り上げるような方法論を関係者として考えていくことが必要ですね。

香山　したがって、最初の問題に戻りますが、公共建築の一番の役割は、そのような失われた信頼を取り戻すということではないでしょうか。建築が公共的なものだ、みんなのものだという信頼が、失われるような社会にしてはいけないと思うんですよね。

――― 東日本大震災の後、建築家の出番はあまり多くはなかったと、聞いたことがあるのですが。

香山　震災後、様々な被災地で「僕たちは、もう建築家の建物は要らないんです」と言った人がたくさんいると聞いたことがあります。しかしそれは建築家がすべてそうだということではない。本当にしっかりとした建築をつくって感謝されている人もいるんですよ。

僕たちのアトリエのOBが共同で、陸前高田市の小学校に何年がかりで取り組んで、最近ようやく完成させた。本当に苦労してつくり上げた。小さな小学校でしたが、完成したときに村の人たちが喜んで喜んで……。去年の秋に完成して、生徒たちがそこで勉強を始めて、４月に大体必要なことが終わったので、「もう、しばらくは来られなくなります」と言ったときに、先生も生徒も坂道まで見送って手を振って別れを惜しんだ。皆泣き彼も泣いた。そういう仕事をしているのもいるのですよ。こういう話があると、もう少し世の中に知ってほしいと思いますね。

――― そういうところに光を当てたいですね。

香山　ええ。世の中の見えていないところ、そういうところでいろんな声がある、そういうものを求めている人もたくさんいる。そのような声を拾うことが公共の役割ではないか。これは津波で壊された、あの一本松のあった町の話です。

――― すごく被害が大きくて、ほとんど崩壊しましたね。

香山　被害のところも悲惨だけれども、それを移転するためにまず削って造成した山の姿。これも悲惨で見ただけで胸が痛みますね。そんなところに住めと言われたって、最初は何もない砂漠みたいにパーッと平らなところでしょう。散歩する気にもなれないと言われていたそうです。しかしそこに安いコストでいい小学校をつくった。それがきっかけとなって、みんなそこを散歩するのが好きになってきたそうです。少しずつそうなってきているんですね。これは建築の力ですね。

さっき僕はネガティブな面からの発言もしましたが、一方で、一生懸命そういう努力をしている建築家もいる。地域の中でもそういうものを求めている人がいる。それは大きな希望だと思っています。

――― そのような方々に頑張ってもらえるような環境整備というか、雰囲気づくりを、建築の周辺にいる我々関係者も微力ながら努力していかなければと思います。

香山　そのとおりです。建築は、人間が正に原始時代からつくってきた一番の基本的な技術でしょう。これは人間が人間として一緒に暮らしている限り、永遠に続けなければならない仕事です。僕が自分の人生を振り返って考えてみても、昔あった技術で今はなくなったものはいっぱいあるわけです。例えば、蒸気機関車なんて昔ワクワクして見たけれども、今はもう走っていない。その技術もなくなったわけでしょう。あったとしても観光で走らせているだけです、そんなところです。コンピュータだって、やがていつかなくなるかもわからない。しかし、建築は人間がいる限りなくならない。

――― 昔の著名な建築家が設計した建物など歴史的な建築物を改修して保存・活用する事例が非常に多くなってきました。先生もそのような取組みを横浜税関本館や京都会館で実践されました。既存建物を保存しながら新しい機能を追加するのは、非常に難易度の高い設計ですね。

香山　それは先ほどのお話に繋がりますが、公共建築は本来長く生きていかねばならない建物なのです。修理も含めて、部分的に壊したり、つけ足したりされながら使われていくわけです。桂離宮だけでない、みんなそうです。それが今生きている、ということです。そういう生きて継続する力を本来求められているのが公共建築だと思うのです。

この前、古い日本の本を読んでいると、公（おおやけ）というのは、日本の古い言葉で大家（おおや）が語源となった言葉であることを知りました。公は大きい家ということなんだ。例えば、縄文時代にできた三内丸山遺跡の建物を見てみると、みんなそれぞれが小さな小屋に住んでいた。しかしその集落の中心に大きい家があります。それが公なんです。ああ、分かりやすいなと思いましたね。公共建築の始まりですね。

――　大きい家にみんなが集まる。

香山　みんなが集まる部屋が公なんだから、そういうことに思いが至ると、公共建築というのは人間社会の根本だと気づくね。人間は一人だけでは住めない。そういう昔からある基本的な力が求められているわけで、永遠にそのことは消えることはない。ですから、そういう力をちゃんと捉えるならば、「公共建築は不滅だ」ということになる。

木材などの活用

――　次の話題に移らせていただきます。先生は木造建築にも多数取り組まれていると伺っています。日頃の設計活動を通じて、それらのコスト管理の工夫や問題意識などについて、お聞かせください。

香山　建築コスト管理システム研究所が、コストに関する基本情報を収集・公表されているのは、僕たちが様々な仕事をするときの基本なので、本当にありがたいと常々思っています。

その上で、今日様々な設計を進めながら考えていくと、従来の単価を拾うだけではできないものに直面するんです。たくさんの例がありますが、例えば今、京丹波という町の庁舎を、その町の木だけでつくろうと思って取り組んでいるんですが、木造だけでやると工事費が高くなるからやめろとか、様々な話がいっぱい出る。確かに積算したら、２階建ての建物ぐらいだったら鉄骨か鉄筋コンクリートでつくった方が、どう積算したって安くなるのです。しかし、なんとか、木でつくりたい。なぜなら元々京丹波というのは、京都の都をつくるときの木を出してきた、日本の歴史を支えてきた木の生産地です。それが今、死んでいる

状態にあるのは、情けない。それで、木材を上手に活用する工夫をして、何とか鉄筋コンクリートと同じ値段というところまで持って来ました。

木材の使用を難しくしている理由の一つは、木材の値段は、実際の生産地の山で切ったときの値段に加えて、運搬賃や加工賃などの様々な費用が加えられて決まることです。標準のJAS規格品の使用を求められる場合もあります。また集成材を使うことになると、単純なものをつくる工場でも地方のすべての町にあるわけではありません。遠方の工場での製作が必要になり、往復の運賃でも値段が高くなるわけです。

それで、京丹波で一番工夫したのは、現地で切った木を使ってつくること。しかも、出来るだけ材料に加工はしない。そこでとれる木材には細いのも太いのもありますから、基本設計段階からよく考えておいて、それぞれを使いこなすというふうにすればいい。これを口で言うのは簡単なんだけどね……。

また木を切るには順序があります。京丹波の庁舎はそんなに大きいものではありませんから、そこの町だけでも、必要な量の木はとれるのです。しかし、もし必要なだけ切ってしまうと、そこの木はまた60年ぐらい生産できない。建築家だから自分の建物だけができればいいと考えるのではなく、木材の生産の専門家、森林資源を研究している人、地元の人たちとチームを組んで、切る順序まできちっと考えて、森林の生産性が保たれるように、それをどう使うかというのを基本設計の段階でやらなくてはいけないのです。これは流通材をただ買って使うこととは違うわけで、挑戦的で面白いのですが、僕たち建築家だけの知識ではできない、様々な専門家との協同が要るのです。

それを積算の話となると、木材についてはどの段階でどうやって積算をするのか。最終的には設計をして、それで工事の入札にかけますが、一方で、木材の手当てはその前に全部しておかなければなりません。非常に難しい。

――― 現実的にはその段取りが必要ですね。

香山　しかし、それは標準的な積算ではできないでしょう。

――― おっしゃるとおりです。そこについて、何か方法論を編み出さないと、木造建築が広がらないのです。

香山　僕たちはレンガも長持ちし、断熱性能も優れているので出来るだけ使おうと思っているんだけど、レンガもそれに似た課題があります。地域のものでつくるのが一番安いのですが、今、地域でレンガをつくっているところはほとんどなくなっています。

――― 木材など地域材の活用については、発注者サイドとしても様々に検討する事柄が多く、今後の大きな課題の一つだろうと感じます。

企画・設計段階の新たな方式の模索

――― 最後に、今日のお話を総括してお伺いできればと思います。いい建築を設計するためには、品質、コスト、工期などの様々な要素をバランスよく調和させていく必要があります。一方で、求められるものは大きく変化していますし、新しい考え方の導入の検討も必要になっていると思います。先生のお考えをお聞かせください。

香山　直面する基本的な大きな問題は、建築の様々な機能が集約化あるいは複合化されるようになってきたということだと思います。大昔は、様々な公共的な機能は大きな建物の中で一括りに集約されていた。しかし、社会の発展とともに、その機能がだんだん専門分化されてきました。例えば教会の中から病院が分離独立して建てられた。学校も別に建てられるようになった。近代社会とは、求められるそれぞれの機能を高度化するために一つひとつを分化し特化していく道だったと言っていいと思います。

しかし、その結果、社会の総合性が希薄になってきた、したがって、それをもう一度全体に戻そう、少しずつ戻したいという動きが起こってきている。さっき言った市民運動で、図書館を市役所

と一緒にしてくれと。今、京丹波でも庁舎の中に図書館を入れようとしています。そのようなニーズはとても多い。山形でもそのような試みを進めようとしています。

――― 我が国は人口が減ってきています。必然的に、様々なもののダウンサイジングが求められます。公共建築も同じ状況にありますから、既存建物も含めた有効活用が重要になります。財政的な余力にも限りがありますから、そのような方向性に向かわざるを得ないのでしょうね。

香山 それに対応するためには、設計の初期段階で、あるいは企画の段階からそれを考える。しかし、そこで全部答えを出せないので、設計をしながら、あるいは場合によっては設計が終わって工事が終わってから、使いながら考えるということも出てくるのです。それにどういうふうに対応するのか、従来のままでは答えが出てこない。そのような問題だと僕は思っていますね。

――― それに応じた新しい方法論を考えていかないといけないですね。当研究所は、企画段階・設計段階での様々な方法論についても今後力を入れたいと考えております。今後ともご指導をよろしくお願いします。

香山 それには、例えば国全体に通じる大きなシステムという形で考えるというアプローチもありますが、僕たちみたいに個々の建築で悪戦苦闘している人間は、個別の問題を解決することをいくつか積み重ねることで、少しずつ全体に繋がる共通なものが見えてくる。そのようなアプローチも同時に必要だと思っています。見えそうな気もするんだけど、現実にはまだなかなか見えませんが……。

――― 個別解をいろいろ見せていただいて、それらが集まってくると一般解化できるようになる可能性はありますね。

香山 個別が積み重なって一つの全体の方式が出てくる、あるいは全体から個別をとらえ直す、その相互往復が求められる。

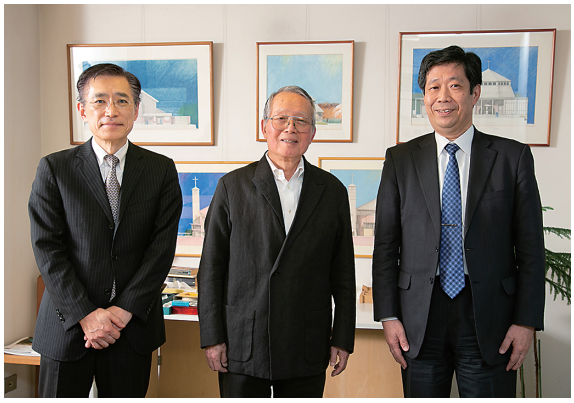
――― 逆に一般解から入ると理念的になってしまい、それこそ機能しないものがつくられる可能性があります。頭の中だけで考えるのではなく、現場から出た成果を一つひとついただきながら、考えを進めていくことがよいかもしれないですね。

香山 それは建築という技術の持っている昔からの基本的な性質で、一般解から入ると、一つ二つのものにはいいけれども、10も20ものものにはとてもうまくいかない。そういうことが多いでしょう。

――― そういう上手くいった事例に脚光を浴びせて、多くの方に見てもらえるようにすることが大切ですね。様々な建築賞がありますが、それぞれにそのような役割が期待されているのだと思います。一つひとつを関係者の方々に見ていただいて、それが積み重なって一定の成果に結びついていけばよいですね。

香山 僕もいくつかの賞の審査にも参加させていただいたし、受賞経験もあります。様々な建築賞は、具体的なことを実例で見せてくださる貴重な機会だと思います。僕も、これからも町の建築家の一人として頑張っていきたいと思っています。

――― 長時間にわたりまして多くの貴重なお話をお伺いしました。本当にありがとうございました。結びに、先生のますますのご活躍を心よりお祈りいたします。



聞き手／
本誌編集企画委員長　羽山 眞一
（（一社）公共建築協会　常務理事）
本誌発行人　川元　茂
（（一財）建築コスト管理システム研究所　専務理事）